

綴方文集

オニ号

December 16, 1935

カンブトン学園

西木辰子



子辰森西者著と園學ントブンカ

紹介

在米日本語学園に於て修得せる日本語の實力検討の必要が叫ばれて居る折柄、今回本学園優秀生の一人である西本林嬢の自作自筆綴方文集を發行して学園関係者並に学園児童の作品に特別の興味を有して居らるゝ方々の参考に供するを得て大へん嬉しく存じます。西本林嬢は滿十一年生我がカンプトン学園に通學し、最も熱心に勉強されたので日本語の理解や書方等に至るまで他生徒の模範となる様々な好成绩を與へて居りました。本文集に收めてある作品は西本林嬢の綴方帳より選出したもので特別の作ではなく文中の誤字や語句に多少の修正を加へたところもありますが、着眼構想等自作のまゝなのです。實力から見て西本林嬢などは当然本学園の選手として南加学園協会の

の綴方競技大会に出場する資格があつたのでした。が、幼少の折僅か二月日本の小学校に通學したために出場出来なかつたのであります。

本文集が昨年末に發行した佐々木靜子嬢の自作自筆文集と共に在米日本語教育の上は何等かの良き刺激となるを得ば甚幸甚と存じます。

昭和十年十二月二十五日

カンプトン学園長

遠藤幸四郎

(辰子代筆)

はしがき

成に拙い私の綴方を冊子に
纏めて芳柳に目にかけてます
ことは餘りにもをこがましいと存
にまうたが恩師遠藤先生の
お言葉のまゝに不馴れな鉄筆
で原稿用紙に書き上げて刷つて
見ました。観察や文章の幼稚
なのは申上ぐるまでもなく誤字や
誤句など多々座いますから
気附きの点は何卒に教示下さ
います。拙お願ひいたします。

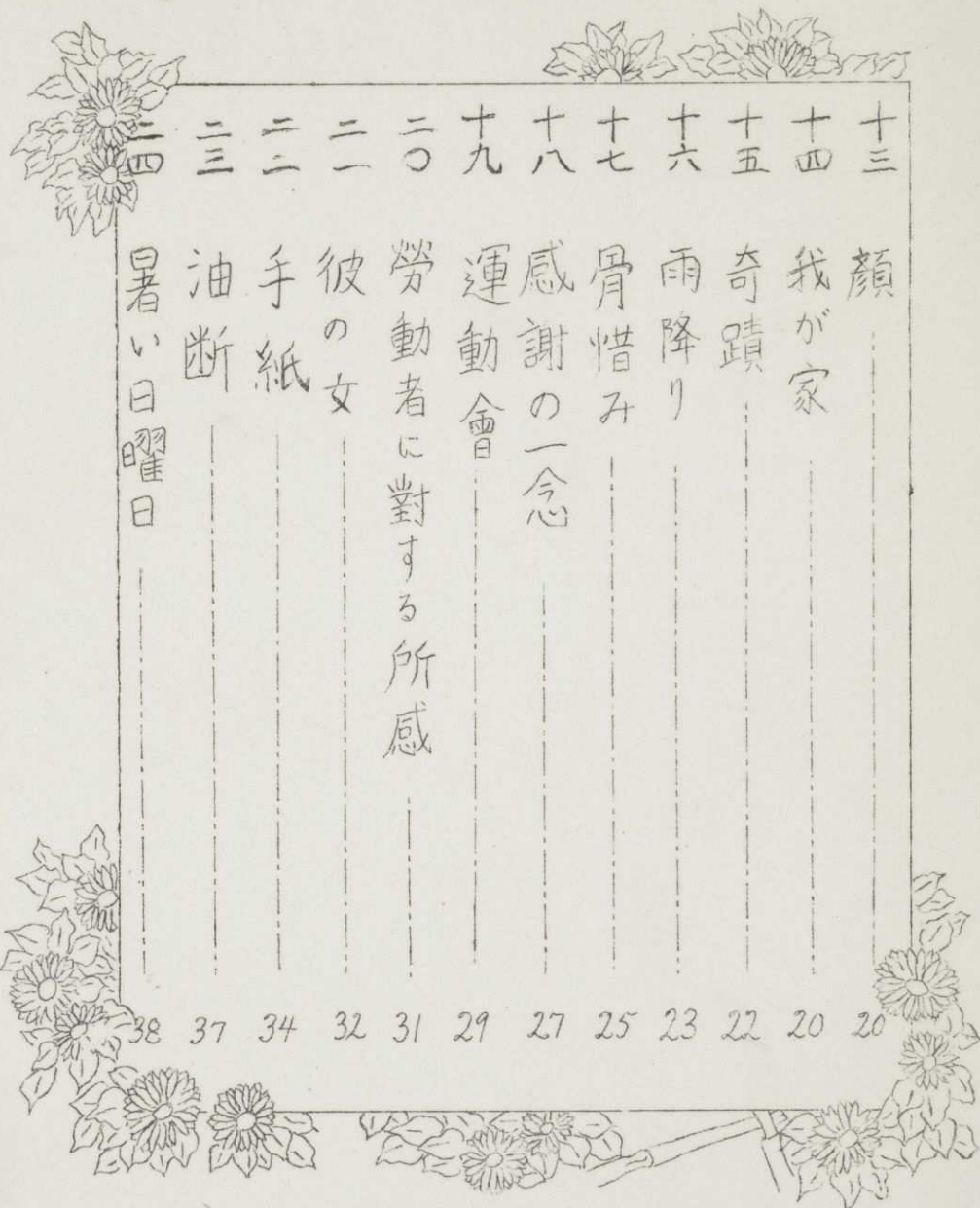
昭和十年十二月クリスマス日の日に

カンプトン学園生徒

西本辰子

目次

一	日本帝国	1
二	優しい心	3
三	時計	4
四	決勝戦	5
五	ピアノの先生	7
六	苗くばり	9
七	英子さん	10
八	運動會の前日	12
九	母の寫眞	13
十	学友	14
十一	近況を報らせる手紙	16
十二	勉強振り	18



十三

顔

十四

我が家

十五

奇蹟

十六

雨降り

十七

骨惜み

十八

感謝の一念

十九

運動會

二十

労働者に對する所感

二十一

彼の女

二十二

手紙

二十三

油断

二十四

暑い日曜日

20

20

22

23

25

27

29

31

32

34

37

38



日本帝國

明治維新を世界にその存在を知られてゐなかつた日本が僅か七八十年の中に非常なる進歩発展を遂げ其の名聲は全世界の津々浦々迄及びく稀になつたのである。

世界地圖に現はれる大日本帝國を見れば小指二本で覆はれてしまふ程の小國である。之に比較すると他の列國は二倍も三倍も或は幾十倍も広い。其の上日本には天産物も尠くことに工業のものとなる鉄や石炭にも富んで居ない。金山も少なければ耕作地も狭少である。

其では何物が日本を斯く迄立派な強國にしたのであらうか。それは言ふまでもなく日本人特有の清浄の美を愛する國民性であらねばならぬ。日

本には他國に比類の無い美しい歴史がある。世界には國は多いが萬世系の天皇を戴くものは独り大日本帝國のみである。

外國の歴史における争鬪は大方、君主と人民との戰である。然し日本には君主と臣民との間に明白なる區別があり、君臣互に攻め合つた事がない。又日本は開國以來、未だ曾て、外國の辱めを受けた事がなく、他民族の血液を多く混せない清浄な國である。

日本國民には如何なる場合にも、よく忠によく孝によく義によく仁にその為には命を賭しよく進んで行く強い勇ましい大和魂が漲つて居る。日露戦争で大勝利を得たのもこの雪辱し日本魂の発露の結果である。

敷島の大和心を人間はば

朝日に白ふ山桜花
この歌が日本人一般が愛誦これ

るも国民精神の純美を現はして
居るからである。

アメリカのペリ提督によつて始めて自覺
めた時の日本はヒリピン^{の如き}唯一つの島
国に過ぎなかつたのである。当時日本
人は西洋の物質文明を見て欧米
人を非常に尊敬し自分を毎々暗に
卑下したものであつた。又外国に移
住して居る日本人は生活程なが低い
とか、余りに勤勉なるが爲に排斥された
り、侮られたりしても、黙々として辛
月日を送つて居なければならなかつたの
である。然し先年の満洲事変以來
日本は再び生れ変つて来たのである。外
国のおとし位でまんまと瞞されて居た昔
の日本ではなくなつたのである。東洋

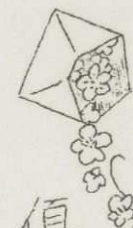
の覇者として、又世界

列

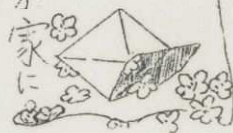


強中の一國として正義の爲には全
世界を敵としても戦ふの覚悟と
自信とを持つ様になつたのである。
肉弾三勇士などはその最適例で
あると思ふ。

日本は既に世界三大強國の地位を
確保し、國家の勢力は日々盛
盛になつて居るのである。現代では、
毎々智者なる者の他は日本人を侮る
梯な事は決してしない。我々才二世
は他國に優れて居る日本帝國の
子孫である事を心から感謝する
と共に其の責任を自覺として、大いに
自重しなければならぬと思ふ。



優しい心



午後の法要をすまき我が家に
帰つたのは早や黄昏であつた。

自分の室に這入ると机の上に白い封
筒が置いてあつた。「どなたから？」と
封を開くと中から四つ折りにしてあ
る美しい一枚のカードが現はれた。

「おや！ 私宛に誕生祝のカード？
はて、人違ひではないかしら」と裏の

署名を見ると在学中、私達をよ

く世話話として下さつた、清子さんかうで
あつた。有難う！と私は余りの嬉

しさに胸は一杯になり、眼には熱い涙が
滲んで来た。今にも零れ落ちやうと

するのをあさへて、暫く毎言の儘彼
の女の優しい署名をみつめて居た。内

側に書いてある四行の祝ひの言葉、世末の
一字々に、友情がこもつて居た。

彼の女は私より三つばかり年上の先

輩である。納い頃から、同じ小学校
ハイスクールに通つて、午後の三時か
らは雨の日も、風の日も毎日、日本語
学校の同じ教室で学んで来たの
であつた。夏休みになると、それ

キヤンプ、ピクニックと、彼の女が私達
を引連れて、先生両監督のもとに
ビーチに行つた事などは一生忘れ
られない。サンシャイン倶楽部の参

合やパーティーは私にとつては、何より
も待ち遠しい嬉しい集ひであつた。

彼の女のいうしやつた時の野球
チームの威勢の良かつたるや！こ

れも全責任を背負つて、色々と
お骨折りを下さつた、清子さんのお蔭

なのだ。時々には厭な批評等された
事もあつたが、その辛い事を顔

色に現はさず、最後迄、世話話と
下さつたあの心遣ひは今になつてはじめて

はつきり分つて来た。

結婚生活にあ言入りになつてから
も、もう三年余りにもなるが、私達

の事を覚えて居て下さる彼の女の
優しい友情は、少しも変らないで、然
も、私自身二へ忘れかけて居た私の
誕生日を心から祝つて下さつたのは、
清子さんだけである。一枚のカードで
も、誠心こめたものであれば、こんな
にも尊く、嬉しく思はれるものかとつく
づく感じた。



時計

「ガリン」
始業の鐘がなつた。生徒
は、早稲いそ／＼と各自の教
室に這入つて着席した。

すると先生は「紙と鉛筆をお出しなさい」と仰つた。予習を怠つた私は周章して教科書の頁をくり始めた。

「どんな問題をお出しになるかしら……」
やさしいのであればよいが……とひそかに希望したけれども、それも毎々駄であった。問題は昨晚怠けた所から出た。与

へられた時間は十五分。教室は急に静かになつて、かた／＼と紙の上を走る鉛筆の忙し／＼な音が、かち／＼／＼と時計の音も急に耳につき出した。問題は一つだが、最初のステップが解らなくては手のつけやうがない。鉛筆を拵つた手をもじく／＼させながら、考へやうとしても気ばかりあせつて、頭は朦朧としてしまつた。

刻一刻と過ぎて、与へられた十五分は容赦なく消えて行つた。隣のAさんは早く済ませて暢気／＼に読書して居た。次から次へと答案本を出す人の足音がぞろ／＼。私は益々、い／＼／＼して来た。時計を見れば後五分しかなかつた。靴音、時計の音が入り混つて、頭の中に渦を巻いてゐた。人の気も知らないで忙し／＼に動いて居る時計が憎らしかつた。いくら考へても頭は凍つてしまつた。楯に働いてくれなかつた。

もう駄目だ！やけになつて鉛筆を抛つて諦めると急に気が落附いて来た。そして意地悪くも今になつて、問題が少しづつ解つて来た。大急ぎで書き始めたが、いくら急いだ所で三分間にどうして書き終る事が出来やう。物に時百の嚴格な先生の事である。一分後れくも答案は屑箱に捨てられるのである。仕方なく私は中途で止めて時百通りに出した。習日、返して戴いた答案本の点は誠に耻しいものであつた。せめて、あの時あの時計の針が二分間、やつくりしてくれたならば、こんなみじめな結果にならなかつたであらうと口惜しかつた。

決勝戦

用事をするまぎれ、本道大勢を覗いたのは夕方の八時頃であつた。場内は立錐の余地もなく、入口迄大勢の

見物人で埋つて居た。丁な幼手組の決勝戦の最中で、次が少手組の決勝戦になるのたつた。その一方はモネタ道場の送りである。モネタ道場の少手組が決勝戦まで進んだのは珍しい事であつた。日本に居る兄に報らせようと思つたら、こぞお吉世びになるであらうと思ふと私も其の試合を見て歸りたくなつて、足の痛いのを我慢して入口に立つて居た。前の人の頭と頭の間のからうのぞく極にしろ、見るのは容易ではなかつたが、愈々少手組の決勝戦が暖まるとそんな事はすつかり忘れてしまつた。両軍の選手が腕と腕を掴み合つた時には胸がどきどきした。だが、モネタ道場の活さんが綺麗な技で敵を投げたので、けつとした。應援者もわつと歡喜の声を挙げた。次の選手と対抗したと思ふと「一本！」と叫ぶ審判官のすき通る振な声、目にも止らぬ早

技であつた。何方が勝つたのか、合点が
いかなかったが、モネタの見物席から
洩れて来る「勝」の声を聞いて、燃めて
手を叩く喜んだ。二人も負かした
のだから、今日の勝負員はモネタの物だ
と一人ざめをしく、観衆の中には帰る
ものゝ居た。もう一人投げたうまいが
と慾を出して居ると、今度はあべこべ
に投げられてしまつた。次の選手が又
いゝ技で敵を投げて見事雪辱した。そ
モネタ貝貝肩の者は余りの嫉しに有
頂天になつてしまつた。選手も少し
油断をしたらしい。私達の最も期待
して居た二人の選手は疲れて居る敵に
安々と投げられてしまつた。敵は二人に
味方は第一人になつてしまつた。余りに
も期待がはづれたので、観衆も緊張
した。手に汗を握つて見て居た。私の
胸も早鐘をつき出した。「勝つ捕にー
勝つ捕にー」と祈りたい程、真剣にな
つて見て居たが、何だか負けさうな予
感がふと胸をかすめた。弟の責任は

重い! と思ふと自分自分の事の
捕に思はず戦慄した。前の人頭
が邪魔になつてたまつないので思
ひきつて人ごみを押し分けて前の
方に出た。弟は敵と互に腕を掴
み合つて足調子を揃へて左右に動
いて居た。ゴ—く—く—とマツトを足
ですつて行く音がする。其の中に
三人も投げたので疲れて居た敵は
弟にたやすく投げられてしまつた。次
に出場したのはひんぐ—とした元気の
い主将であつた。素敏しこさうな
二つの眼はさうく—光つて、体をあ
節ごんの筋に曲げて居た。身長は
弟より少し小さいが、体には一寸の隙
もなかつた。体をまげる事を知らな
い弟はまるつきり反対の姿勢で、
組合はうとするので妙な恰好に見
えた。思ひきり体を曲げた敵は相
手の脚に飛びついて来るのにもつてこ
いの構へであつた。又、其れが、彼の得
意らしく、足に飛びつくばかりで他に

は技がないらしい。弟も閉口した態で組合つて居る中に見事に両足をタックルされ、尻餅をついて「わざあり」と宣告された。その時、弟は極めて忿激した表情を見せて、それより、彼によりつかせなかつた。二人は睨み合つて時々、組合つたと思ふと直にわかれてにらみ合つて居た。双方ともこうして居る中に時が過ぎってしまった。

彼は最後まで、執念深く弟の両脚を睨みながら、ひきわけになつてしまった。主將ともある者があんな動作をするとは実に醜態だと思つた。

残つた四人の中から一番強さうなのを、

両軍は選び出して対立させた。少年組の勝負は彼等二人の双肩にかゝつて居るのであるから、双方とも必死になつて戦つた。敵は中々強さうなもので見て居る私はひや／＼とさせられた。

其の中に突然「あつ！」と観衆の叫ぶ声がした。驚いて見上げた時には、モネタの選手が既に投げられた所であ

つた。「一本！」と審判官の声を聞いた。敵はわい／＼と叫んで喜んで居た。正々堂々と戦つて負けた味方の選手は淋しき顔。後からうすければその選手は自分の責任の重いのを感じて男泣きに泣いて、念がつて居たとか……私も思はずほろりとさせられた。



ピアノの先生

日本人好きな先生にピアノを習ひたいと望

んで居た私はお友達に紹介されて、今の先生に教はる様になつたのである。優しいお方だとは、常々、お友達からうすかされて居たが、お目にかつてからは、一層其の感じが深のうれた。赤い頭髮を後にたばねて、何時も質素な風をしていうしやるが、何処となく上品である。

「先生からお習ひした方から紹介されて参りました」と申し上げてお習ひした時、先生は非常に喜んで、承諾下さった。「二年前までは、沢山の日本人の方に教へてゐましたが、体を悪くして、それつきり、はつたり止めてしまひました。皆、本当に優しい方ばかりでした。先生はお弟子の誰彼を思ひ出して、懐しうに色々な事を語つて下さった。近所に居る二三軒の日本人達のお事も、頻りに憶ひのていらつしやつた。日本人は立派な人種だと思ひます」と何処までも日本人を信じて、愛敬していらつしやるのである。

歸りには隣のドッグ・ファームを見せて下さつたり、自分でおつくりになつた広い庭園や、大きな池にも、案内して下さつた。綺麗なピンクの百合を惜し気もなく五六本抜いて下さつたりして、おいとまする時には、もう十年も親しくしてゐて居る程な気がした。これから毎週、こんな優しい先生に教

はるのかと思ふと、悔しくてたまらなかつた。「いゝ先生ね」と私は一しよに入門した静子さんと二人で大満足で歸つて来た。

日本人をよく交際していらつしやるせいが、日本人の心持をよく知つていらつしやる。お父さんやお母さんが、汗水を流して働いてゐられるのは、何れあなた方を学校に通はせ、色々な事を習はせて立派な子に育てたいからなのです。一生涯懸命にお稽古なさるなけりば、いけませんとおこしになる。私達に続いて入門した小さいいところでは、又お説教をうかされたと言ひながら、立派な先生だ、と心から尊敬してゐる。或日、ピアノのお稽古中、静子さんが急に眼が痛くなつて、やわつた事があつた。其の時、先生は大変、心配なすつて、ソファにゆかせて、冷い手拭ひで眼をひやしなから、「かうして病人を看護するのが一番好きです。小さい時から看護婦になりたいと希つて

居たのに、果せなかつた事が残念でたま
りません」とおつしやつて居た。何処まで
も心の優しい先生……こんな親切
な方に看護して戴いたら患者もどん
なに幸福であつたがらうない。眼を閉ぢ
て横になつて居る静子さんを見守つて
いうしやる先生の横顔は、恰も慈母
の梯に思はれた。

いごヒアのお稽古にかゝるときつい先
生に思はれる程、真剣になつていうて
やる。何時もお稽古が不十分な為
に、私達は満足にひける事は滅多に
ない。それでも先生は厭な顔もなさ
らず、一心に説明したり、勵したりして下
さる。中々上達しない自分に、自分で
愛を注がつさる梯な事がな々あるのに、
かうまでして戴いて本当に勿体ないと思
ふけれど、一なだつて満足に出来ないので
申しわけがない。

苗くばり

オニ学期も終つて、再び夏休みを迎

へる梯になつた。丁度セロリ植の忙し
い最中であつたので、早速、そのお手
伝ひをさせられた。早くから畑に出る
支那をして、苗の来る所を、従姉妹
達と話しながら待つて居ると、小さな
ツラクが、かうく、と今にもこけれさうな
音をたて、近づいて来た。一家六人の
他に、メキシカン、白人が六七人居た。
彼等は早速、苗箱を畑に配つた。
私達は晩一杯苗を抱へてとんとくと
走る梯にして長い畝に配つた。傷くの
も久しぶりだし、其の上、涼しい日和な
ので、皆、非常に元気が好い。メキシカン
等もわき眼もふらず、こつくとホー
を打つてセロリを植ゑ、六七人が揃つ
て畝を進んで居た。

丁度、三畝目の半頃、私と成ちゃん
と競争になつてしまつた。最初、成
ちゃんの勢がよくて中々、勝てさうも
なかつた。「成ちゃん、早いけれど長
続きしないからやはり駄目よ」と負け
惜しみを言つてやると、「大丈夫だよ！」

と益々得意になつて、夢中になつて配つて居た。然し、その古のかけかぬ中にぞろ／＼疲労を感じたらしく、私を押したり、笛を奪ひ取つたりして、邪魔を始めた。私も負けずに仕返しをしなからやつて居たが、とう／＼成ちゃんに一吠ばかり後れてしまつた。

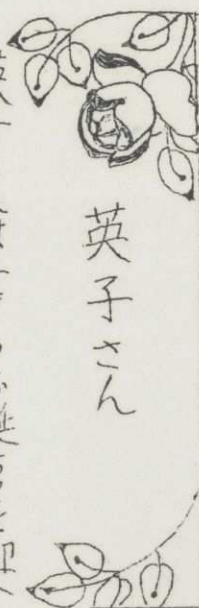
「ばんざいー」と歓声をあげて、成ちゃんは何処かへ行つてしまつた。大分、疲れたらしく、それつゞり、競争しやうとは言はなかつた。

時計のたつにつれて、相当疲れて来た。と見え、一人、二人が時計を気にし出した。あ、腰が痛いーと叫んでは、畝に座り込んでゐる者もあつた。さつきの櫛にわい／＼とはしやぐ元氣なくなつて来た。メキシカンの働いて居るのを、じつと見つめて居ると、彼等も幾なとなく、立ち上つては、腰をのばして休んで居た。

「仕るは厭なものだ。やはり学校が一番い」と思つた。其の日程、五時の汽笛の嫌／＼かつた事はなかつた。其の夜は勉強すしやう

かと思つたが、体が痛む上に、烈しい頭痛がするので、八時半頃、床に這入つた。裁縫ミシンのかち／＼する音、パーラで叔母や父の話してゐる声、成ちゃん達の騒ぎをきいて居る中、いつしかぐつすり寐込んでしまつた。

翌朝は股や肩がしびれた櫛になつて、動かすな毎に思はず、「痛いー」と声を出して居た。



英子さん

英子さんは二才のお誕生を迎へたばかりの可／＼愛らしいお嬢さんである。色が白く、林檎の櫛な血色の頬には深いえくぼがあつて、笑ふと一層可愛らしくなる。彼の女は子供好きの春見さんによく懐いて、げしやんと廻らぬ古で暮らす姿はいぢらしい。最近、静子さんの名前も覚えて、誰に

対しても「ちいたん」と呼ぶ「だちやん」と言つて「お嬢なさい」と、私の名も呼ばせようとしたが「た」がどうしても言へないらしい。幾度教へても「どうちやん」になつてしまふ。彼の女の家に行くとき必ず「うちやい」と面白格好の挨拶儀をして居たが、近頃は私達が這入つて行くと「はーしやん来た」と飛びついてくる程、親しくなつて来た。そして「こつち」とパーラーに引張つて行つて椅子を指し、時には氣を利かして座蒲団まで敷いてくれる事もある。「お髭をうるめておやうなさい」と英子さんのお母さんが仰ると何処で覺えたのか、自昇の下のお髭を抜く眞似をして、それを私達達の自昇下にうるめてくれるのである。「ねんねする時にはお目々はどうするの？」と尋ねると直横になつて眼を毎理に固く閉ぢて滑稽な顔付をする。可笑しいやう可愛らしいやうで、誰も笑はずに居られない。彼の女が「かけいん」をうつる姿は又たまうなく可愛い。首を一寸かしげて、だきつく梯にして片手で相手の頭を撫でながら

「かーい」と言ふ。そんな時には私とも力一杯で抱きしめてやる。「はーしやん」と言ふのがやつとであつた。英子やんも段々と智慧づいて悪い事でも善い事でも直に眞似する癖になつた。此のゝ着物を着せてやつた時、うつかり「オーケー」と言つた所が即座に「オーケー」と眞似されてはつとした。それからかう二三日は何と言つても「オーケー」とばかり言つて笑を氣にさく居た。一時は何処で覺えたのか「ドン」といふ言葉を使つて使つて居た。昨日も冗談に「こつちへ来い」と言つた所が直におぼえて大きな人をつかまへて「こつちこい」と言ひ出したのには赤面させられた。「こつちへいらいしやい」と言ふのですよと直してやつてもさうばり通じないらしい。相変らず「こつちこい」と人の袖を引張るのには困つてしまつた。うつかり悪い言葉を使ふと直に覺えられてしまふから油断は出来ない。小さい事に非常に感動しやすいのが

彼の女の物長である。彼の女の誕生祝に赤い着物に靴下と靴を揃へてやつた所が飛び上つて喜んで手離さなかつた。白い顔に紅い着物はよく似合つた。髪をとき、化粧した時の嬌しうな顔！英ちゃんも喜ぶさまを見て居るだけでも嬉しい感じがした。

記念に英ちゃんの可愛い姿をフィルムにおさめたいと写真屋に連れて行つた。撮影室に這入ると英ちゃんは急に私に抱きついて見慣れない四辺をじろく／＼見ながら蒼い顔をして居た。奥から白人の写真師が来ると顔をそ向けて泣き出して、とう／＼撮らせなかつた。見慣れない所に来るとこんなにも気の小さいお嬢さん育ちの英ちゃんである。私を唯一の頼りとして抱きつかれるので、自分自身も泣き出したくなる程、可哀さうになり、これ以上、無理にすゝめる気にはどうしてもなれなかつた。写真師には迷惑をかけて気の毒であつたが、其の儘帰る事にした。外に出た時の英ちゃんの安心した様子を見た時には「あんなにびつくりさせて済ま

なかつたね」とお詫したい位であつた。英ちゃんとおんで居ると何百のたつとも知らずに居る。「さあ、帰りませうね」と言ふと機嫌の好かつた彼女の女は急に大声をはりあげて泣き出す。「こんなに私を道に導いてくれるいぢらしい子供の心に後髪を引かれる様な気持ちで、又、直来るのよ」と言つて逃げる様にして別れるのが常である。

運動會の前日

大空には薄単色の雲が一面に漂いて今朝から不安の天氣が続いて居る。皆、洛附かない空を仰いで見ては眉をひそめて居る。それもその筈、明日は我等一同の待ち焦がれて居る春期大運動會のある日なのである。一週百も前から父兄方のお骨折りで広い運動場は見事に準備が整つてゐる。私共はレギュラの生徒席の装飾を終へて、翻る万口旗のもとで走る生徒達の元

気な姿を想像しながら帰途に就いたのは
晝頃であつたけれども空の模様は午後になつてもさうはりよくならず朝の儘で暮れてしまつた。

「対戦競技に勝てるかしら」少し怪しいわ

「何、買けるものか」と弟達が食堂までは運動会の話で夢中になつて居た。又、台所で夕飯の支度をして居るお共の話題も自然と運動会の事になつてしまつた。その時突然、雨！雨が降つて来た！と弟が飛んで這入つて来た。「本当？雨？」と私は急いで玄関に出て見たがそんな気配はない。だまされたのかと思ひながら中に入つたがやっぱり気になるので又、外に出て見た。両手をのけて立つて居ると確かに細かい雨滴のおちるのを感じた。

「とうとう」降り出したのね、竟地悪なお天道様ね」とがっかりしてゐたが幸、小雨は雨もなく止んだのですつかり安心した。

明日の支度には疲れて床に就いたのは十時頃であつた。「明日は晴る様だ」と内心神佛に祈禱しながらうとうとして居ると烈し

い滴りの音が耳についた。じつとずいてゐると、先達のやうに激しく降り出した。明日の運動会も之で滅茶苦茶になつてしまつたと思ふと残念でたまらなかつた。先をやらせ違ふがっかりした表情が眼に浮んで来たので泣きたい程な気持になつて居た時ふと眼を覚した。耳をすまして見たが雨降り所か、四辺は何とも言へない静寂であつた。「あ、夢であつたのか……よくつた」と嬉しいやうに安心やうで再び快い眠りにつく事が出来た。

母の寫眞

「あなたお母さんのお顔を覚えて居る？」と尋ねられても私には寢室の壁にかけてある額入りの顔以外に記憶がないので一生懸命に思ひ出さうとしても僅かに懐かしい母の姿勢や服装等がぼんやりと浮んで来る位なものである。額に這入つて居る母の顔は大変色が白く見える。唇は

割合に厚い方である。末弟のお文座の處

に髪がすっかり薄くなつて居る上、少い頭

髪を後に引張つて束ねて居るので、白い額

が一層出ばつて、よく見える。永だ三十一

才だといふのにお手よりは四つ五つふけて見

える。あの字と眞は、樂しみにして待つて居

た米國へ歸へる時、旅券にはるかに一家

揃つて字しに行つた時に撮つたのであつた。

母を笑はせやうとして、私達は三人は眼の前

で色々と可笑しいと眞似をしてはしやいだの

で、母も幾分か吹き出して困つていうてし

やつたが、愈々、字と眞をとる時には、眞面

目なお顔ををしてをられた。

あの時の記念の字と眞が、永久の別離の

形見にならうとは……私は何時も母の

この字と眞を見るな、に考へるのである。

「笑ひたくて笑へなかつたあの顔……やは

り母にも何かの悲しいなやみがあつて笑へ

なかつたのではなからうかと。

淋しい時には母の優しい顔を心に描くと、何

時も慰心のうれる気がしたため、私は朝に

夕に母の字と眞を眺めては、母の音の声をき

いて、楽しんで居る。



学友

大きなアニールを引出して、静か

な室で頁をくつて居ると、三年前の気

樂な学校生活や懐かしい学友の事な

どか思ひ出された。

デロセインは私の最もよいテニスのパートナー

で、気がよく合つて居た。私は何時も球

を打つよりも、拾ひに行く方が多かつたが、

彼女も、球を垣にぶつける名人であつた。こ

んなに下手な私達でも、オニ学期

からのさく／＼上達して、びりの方だつた。

私達も遂にはダブルの二番目になつた。そ

の時二人が手をとり合つて、飛び上つて

喜んだ事は忘れられない。「シングルに出

ると負けてばかり居る二人なの……」

と皆、不思議がつて居た。

「卒業が来年だつたらよかつたのね」と

語り合ふ私達にとつては一日々々と迫つて来る卒業式が嫌しい様で悲しかった。或日の事、日蔭で休んで居ると彼の女は「卒業したらメキシコに行つて結婚するのよ」と言つて居たが、一年後の今日此の頃は何所で何をしていうつしやるやら……赤ちやんを抱いてよい母親になつていうつしやるのではないかしら……こんな事を思像してゐると急に彼の女が恋しくなつて来た。

「卒業したからと言つて私を忘れないで下さいね」と言ふ意味の文を書いて署名して下さつたのは同級生のりいさんである。九年生時代からの親しいお友達である。今は初等大学に通つていうつしやるさうである。何時もきちんとしたしかもしとやかな方で非常に日本人好きであつた。最優等で卒業演説をおやりになつた程の勤勉家である。二三十年後の彼の女はきつと社会的に立派な人物になるだらうと思ふ。

小学校の時他へ移転してしまつたエッド

フアビサックは才十二年の二学期からひよつこり、私の通つて居るハイスクールに入学して偶然にも、私と同じ教室に這入つて来た。その時「何だか見覚えのある顔だか……」と首を傾けたが、彼の苗字を聞いて「あゝ、あのガニサックだつたのか」と当時の俤名がうつかり口から洩れて思はずはつとした。何も知らない彼は眞面目な表情をして席についた。長い顔、くぼんだ頬、乱れた頭髮、服装の極につかない所々、四年前そつくりであつた。実に彼程、變うの者も珍らしいと思つた。兄弟思ひの彼は何時も妹を自轎車に乗せて歸つて居た。「ヤー女好きさ」がニサックと意地悪の私達は色々な悪口を言つて嘲笑して居たものであつた。妹は氣まり悪がつて、私達のある所を通る時にはわざ／＼歩いて居た。考へて見れば、實に可哀さうな事をして居たものだ。

近況を報うせる手紙

お懐しいお便り下さいまして誠に有難うございました。早速お返事を
存じながら父の病氣の爲に、落着く暇もなく、すつかりおくれしてしまつた。
何卒、御許して下さいませ。

つい此の頃迄、寒い／＼と申して居りましたが、何時しか桃の花が美しく
咲く頃に成りました。御祖母父母様には何時もは機嫌うるけくは消光の由、
一同、お慶び致してをります。私も皆揃つて元気に過してをりますか
う御安心下さいませ。

先日、郵便屋から小包を受け取りました。懐しい御祖母父母様の署名をうろと見
た時には又、きつと珍しいものを送つて下さつたのでせうとお喜びながら開けて見ると
案の定、私の大好きな干松茸が這入つて居ました。私は松茸特有の風味がたま
らない程、好きなのでございませう。特に御祖母父母様方の御手製衣と承りまして
一層嬉しく、一同は非常に喜んで戴きました。二三日で食べてしまふのは余り
勿体ない気が致しましたので少しづつ、お茶に混ぜて煮る様に致しました。それで
も此方は「もうないの？」と言つてがっかりしてゐました。次の木子節に又送つて下
さることを、それを楽しみにしてお待ちしてをります。

丁度、御祖母父母様からの御手紙を受け取りました為、夜でございませう。私含めの方
から大に鐘の音の牡蠣を戴きましたのです。が、父は余り旨しうだかうと言つて
生の儘、戴きました。所がそれがいけなかつたのでせう。宵から急に激しい腹痛
が起りました。私は丁度お守でございましてが帰つて見ると、父が床の
中で苦しんで居るのです。蒼ざめた父の顔を見た瞬間、父は早や此の世の人では

ないのかとこゝ思はれまゝした。早速、医者を呼んで手当をし、歎きま
したが夜明の二時頃までは非常な苦しみて看護し、居る私達も骨を
刻まれる様な苦痛でございすした。けれども嘔氣をもよほしてゐるはずんず
んよくなつて参りましたので、はたの者も安堵の胸を撫でました。

「もう牡蠣は眞平だ」と苦笑して語る父の声を、すぐ毎に当夜の事が思ひ
出されて、そつと致しやす。それ以来、父の体も大分衰弱して病氣がうで
ござい、たが最近はそのつりよくなつて参りましたから御安心下さいませ。
実信の入學の日も段々と近づいて参りました。たゞみの上をばたく、はふ
て告た赤ん坊だった子が早や、中學の制服を着て通學する様になつたの
かと思ふと、過去十余年、手塩にかけ、育て養育下さいました祖父母
様の恩が、勿体なくございす。

私も學校を卒業致しまして、かうも一季近くになりやす。毎日、

静子さんと一緒に家事の両手、傍をしながら、三時半からは日本語學
校に通はせ、裁いて居ります。暇があれば生花のお稽古やピアノの練

習がございすので、後かうと追はれて居る様を忙しい日を過ごし

たりやす。こんなお稽古がなかつたらどんなに樂な事だらうと思ひるも

ありやすが、何でも習ふのは若い時です。若い人は忙しくて困ると言ふ位で

なければいけないと先生が勵まして下さいやうし、習つたかうと云つて損

するのではないやう、何でもお習ひなさいと新しくいうしやつた先生も口

癖の様に、おつしやいます。學校もなし、こんな事を、お稽古するの一番適

当の此の機会を逃さない様に、精出して居ります。叔母も父も喜んで、

私達の希望をかなへて下さいますし、本当に私達は果報者だと感謝

致して居ります。

くだらの事をながく書いてまゐりました。たが今日はこれで筆をとめます。

所二人方共此件を大切になさる。

実信にも此祖父母様之言い事をよく守いて丈夫で勉強致します。様にか
か——こ

四月一日

西本林辰子

祖父母様

勉強振り



新学期が始まって以来、うちの食堂も賑やかな書齋になつた。大きな楕円形の食卓も夕飯の後は毎晩教科書や紙で埋つてしまつた。

熱心に歴史を勉強して居る者も居れば、ペンを走らせて居る者もある。或者は本を忘れて来たとか、宿題が分らないとこぼして居る。パーラーかうは科外読本を

朗読して居る雪ちゃんの声がずえる。その合間に、家人が出たり這入ったりするので勉強室とは思はれぬやかましきである。

こうして毎晩、それ復習、それ予習とまるで寄宿舎の自習室の様である。然し、金曜日の晩になるとこの食堂主もかう空気になる。女中は叔母や父とパーラーでお喋りしてゐるが、その手ピアノを弾いて居る。食ひしんほうの

弟達は台所でハツプコンをいりながら大騒動をくりやる。成るやん達は好きな大豆を煮て居る。ずるい兄達はやつと出来上つたと思ふ頃こそく、這入つて来て、ハツプコンや大豆を失敬して行く。文句を言へば叱られるし、仕方がないので近頃は兄達にとられるつもりで沢山用意しなくてはなる。

土曜日の夜はいつも家をあけるので日曜の晩は大変である。「あー試験があるのだつたー」「習字帖がないー」「尸史の予習をしなれば」と皆は又食堂に這入つて勉強し始める。

「夜盗虫がぬまつたー」と兄達に散々にひやかされながら勉強し居る有様は実に面白い。中ぐも滑稽でもあり、又眞剣なのは綴方を書かうとして居る光景である。綴方は日曜日の夜に書くべきものと思つて居るらしく其迄、すんで居る者は一人も居ない。「何を書かうかしらー」「困つたー」この三人の者は帖面と鉛筆をわけて居る。

く、廻り題を求めて居る。しまひには「い」題を教へてくれたら百拂やる」なんて言ひ出すものもある。或者は「教をくしや」にして「アーダー」と嘆声を洩し居る。後綴方には「余程、頭を悩ませて居る事が分る。何時も一番困るくせに一番早く書き上げてしまふのはさまつて弟達である。下書もきこく」にして「私達」が煩悶し居る中に「すんだ」と言つてはしやき出す。そんなさいに書かれた帖面を見ると先生が何内も汚たないとお叱りになるのも当然だと思つた。

それに及して最後迄書いて居るのは都子さんである。消したり書いたり、時には大きな溜息を洩しながら四五へんも書き直して居る。此が床について夢心地になつてゐる頃、こゝろく、と床に這入つて来る。仕上げたのかと思つて居ると翌朝、家のお掃除をすませると又綴方帖を

出して書き続けて居る。実に根氣よく熱心に書いていうつしやる。私達の作文とけ比較にならない立派な綴方が書けるのも其の裏面にはかうした大きな怒力と熱心があるからなのである。

顔

私は彼の女の顔が大好きである。去年の或日同じ事を従姉妹達に言つた事があつたが「あの人の顔がそんなに気に入つたの？」と三人共、不思議さうに問ひ返した。考へて見れば成程、彼の女位の容貌はべつにある。彼の女より遙かに優れた美貌の持ち主も数へきれの程ある。黒い頭髮は何時も後に引張つて波立たせるのではなく、あつさりとは結ふて居るだけであつて、従姉妹達が同意しないのも無理はないと思ふ程、彼の女の素顔は平凡である。然し、私は其の平凡な顔に包まれて居るやこしこが好きなのである。彼の女の私孝行の評判やう、おとなしい方だと言ふ色々な噂を

すけばすぐ程、美しさや上品さが増して来るのである。綺麗なお方だと讃められて居るのは彼の女の容貌よりむしろ心が美しいからである。

メメの代表美人とか、或は世間一の麗人だとか言つてもてはやさるゝ、稱を羨しい人でも若し其の精神が腐つて居ては折角の美貌も何にかならないと思ふ。皮一枚の装飾の為に毎暗に金や時間を費やさないで、其の幾部みだけでも心の化粧に費やす事が出来たら立派な人になれると思ふ。



十六年の長い間住みなれた家から六哩位離れた今の住居に移つたのは三年前の七月四日の事であつた。友達の家が新しい畑地をさがして

は移轉すると言ふ話を聞く毎につ
まらぬいぬ……私の所ばかりひつこさな
いで……と羨しく思つて居たので、ひ
つこしの話が起つた時の私の喜ぶは一通
ではなかつた。父や兄達は毎日の櫛に地
なうしの為、新しい畑に行つて居たが、
私は未だ一度も其処に行く機会がな
かつた。どんな所かしらと想像して見
ては夕方歸つて来る兄や弟達にうる
さい程色々な質問をした。
「佐居はどんな恰好をして居る？」
「あたりまへの家の恰好さ……」
「室は幾つあるの……大きい？小さい？」
「うん、四つ五つ六つ位あるよ、そんなに大
きくもないが、小さくもないよ」とこん
な風にあひまひな返事はかりして私の
知りたいたいと思ふ事はいくら尋ねてもは
つきりしない。ことに手のいかなない従弟
達は揃つて家の事については無関心で、
三人の説明は皆まちぐ……であつた。誰の
が本当なのか分らない。男なんて、こんな
に各気なのかしら……どうして分らない

いのかしら、と不思議に思はれる位で
あつた。

「今日はちゃんと調べて来てちやうだ
い」と言つて送り出したう、其の日
の夕方には図を、書いて、室が四
つかう並んで、台所と食堂が此処
にあつて、小さい廊下がついて居る」と
詳しく説明してくれた。大分いい
家らしいなとにくくして歩いて居
ると、思ひ出した櫛に「あ、忘れて居
た、もう一つ小さい室があつた」とつけ
足した。又殫えたり、でも丁ない
、ね、裁縫室にすれば……と喜んで
た。
それから数日後、行つて見ると、小こ
い室といふのは食堂からハローに続
いてゐる廊下なのであつた。男なんて
こんなに分らないのかしらと一度呆
れてしまつた。然し家だけは相當に大
きかつた。空家になつて居たのでどの
室もくもの巣が、つて埃だらけで
あつたが洗つたり、壁紙を張つたり、

ペーシリーを揺つたりしたうに見違へる
櫛にきれいになつた。

この家に移つた当夜は本当に驚しくて
私はいとこを這と麗く迄起きてはし
やぎ廻つてゐた。

その家が一年もたない中にあの大地
震で玄關はくづれる、壁紙は弛んで
みすばうしくなつて来たが私にとつては
依然として一日もはなれたい心地のよい
我が家なのである。

大可蹟

床を片附けようとベッドに手をかけ
ると不思議な程重かつたので力まか
せにおした。其の拍子に向ふ側の小こ
なテーブルに括えてあつたラゲラが台と
共に倒れかゝつた。「あっ大変！」と叫ん
で狭い所を毎々茶苦茶に飛んで行
つたがもう麗かつた。「ごんがうく
く」とがらすの毀れた櫛を恐しいひび
きをたてゝ床の上に落ちてしまつた。き
つとツブが滅茶苦茶になつてしまつ

ただううと思ふと急に胸がどくどく
した。三日間、私は式スライシシ
の放送を是非、ずっと聞いて思つてこ
うやらをわざと洗濯場に抱つて
行つたまま、すっかり忘れてしまつた。
夕方、兄が之を見つけてぶんぐんぐん
小言を言ひながら抱つて帰つた所
がツブが一つ毀れて吾たと言つて
散々おこられた。私が使つて吾た時
は何処にも故障はなかつたのだから
私の責任ではないと思つたが、だま
つて使つたのは私だつたのだからか
こまつて、さくほかはなかつた。こんな
事をしなければよかつた。二夜とこ
んな事をくり返すまいと思つて
吾た矢先、こんな不始末である。
暫くは茫然として床の上に膝を
ついた儘、動けなかつた。
毀れて吾たなければいゝが、然し、あ
の音では、それは絶対に不可能であ
ると知りつゝも、萬一の奇蹟を祈り
ながら横になつて吾るラゲラに手をか

けた。今にもかうく／＼とかうすの音がするだらうとおそろく／＼起したる意外にも音はしなかつた。三つのツープの中の一つは床の上にあつた。えはきつと毀れてゐるだらうとよく調べて見たが、ひびきへなかつた。私はツープを抱きしめて、「何と言ふ奇蹟なのだらう」と喜んだ。

然し、忽ち又一つの疑問が起つた。外見は何ともなくても、或は素人の眼に見えない細かな所に故障がありはしないかしらうと、試みに電氣をつけて見る事にしたが、「駄目だつたらう」と言ふ心配が先にたつて、つけやうが、止めやうかと暫くたのうつたあげく勇氣を出して電燈をつけた。ラゲラには火がつかなかつた。「やはり駄目だったのか」とひやりとしたが、ふとラゲラのわづを廻さなければならぬ事に気がついた。がうつしとわづをひねるとぱつと明くなつた。「あつ、ついた！もういゝ」と急いでわづをもとに返した。余りにも不思議な奇蹟に私は敬愕と恐怖と安心とを肩した感情で部屋を掃かうと箒を

抱つたが手がかた／＼雨辰へてきた。

雨降り

或静かな夜、ふと消すれの梯な音がした。おや／＼と思つて耳をすました。他の者も同時に顔をあげて不思議さうに耳をかたむけた。

「へんな音ね、雨かしらう？」とぞくと一同けんなな答はないと言はんばかりに首を振つた。其の中に、音が益々激しくなつて、思ひがけないどしやぶりになつた。「お母さん、大雨よー」といこききは眠についたばかりの叔母を無理にウリ起して舌た。珍しい雨降りに皆はおどろくやら、喜ぶやら、暫くはずき入つてゐた。静まつたと思ふと、激しくなつたり／＼夜通し降り続いた。

「さー／＼／＼」とやかましい音に眼を覺ました時はもう朝であつた。蒲団の中で寐かへりすると冷い空氣が肌にさけてぞつとす

る。平生は厭でも起きなければなら
ないのだが、雨が降つては畑の仕事が出来
ないので朝、寐が出来た。雨降りもこん
な場合には本当に有難いと思つた。
学校通ひの弟達が家を離れた頃、皆は
「こそく」と起き来た。
「よく降るなー」
水引をしなくてよかつた。
と叔母や父の満足さうな話声、從
兄や兄達が来ると又
「よく降るぬー」
「えで水引の方も大助りだ」
「乾ききつて居たナコリも喜んで居る事
だらう」
とこの度の雨降りには室内中を喜びせて
居た。
午後の二時頃、谷川さんの叔父さんと叔母
さんがいちしやつた。
「よくふるなー」
と困つたらしい表情をしていうしやつ
た。それもその筈、ビーズ摘の目取も忙しい
時にこんな不意の雨なので、弱つてい



らつしやるのであつた。
翌日は止むだらうと予期して居たの
に又正午かうバーザー降り出した。
マツケツトの都合で皆、雨を肩して
セロリをきらなければならなかつた。
昨日まで喜んで居た雨が今日は
心配の種になつて来た。
「ナコリは水が過ぐるど直き腐つてし
まふ」
「もう氣を利かして止んでくれはい、
のに」
と皆は氣が気でないらしくセロリ畑
かうナコリ畑の方をまはつて雨の止ま
ないのをこぼして居た。
自分勝手な人百には雨も苦笑し
て居る事だらうと思つた。



骨惜み

(し)西本林辰子

(十八才)

いとこの春見さんは

今朝も周章で、床の始末を忘れて学校へ行つてしまつた。この

口からこれぞ四なる目である。

今日こそは帰つたら彼の女に

自分で片付けさせぬと思つて、わ

ざと其の儘にしておいた。九時

頃、室中すつかり掃除が出来

て綺麗になつたが、くしや

の儘にされて居るいとこの床が

眼ざけりになつて仕方がなかつた。

片付けておかうかしら

だが面倒だ。はふつておかう

と決めた。でも何だか気

になつた。学校から戻つた時に

この不始末な床を眺めたら、いとこ

をばはどんな心持がするであらう。

きつと嫌がるであらう。たつた五

分間の骨折りだ。やつぱり片

付けてあげや。さうす

ればいとこは喜ぶであらうから。

何もかも總てが圓滿に解決す

る。あ、い、るに気がついた。私

は何だか偉大を發見でもした。

柵な歡喜に満ちた心持になり

さっきの面倒と言ふ二字は消

えて唯晴々として来て愉快に歌

ひながら数分の中に床を片附

ける事が出来た。僅かの骨折

を惜しんで居た自分のあせりな

考を非常に恥しく思つた。そして

さうんと教正理された室を眺めると

何とも言へない。さか心の奥

底から湧き出て来た。

此の頃、叔母は一張四維のドレスが余

り長いから短かくして頂戴と頼

まれたるがあつた。わざと裾の

縫目迄とつてお置きになつたので
 ものの五分とちかかうないでやれる
 のにもかへらず、其の中に上げて上げ
 やうと思ひながら、何時の間に、かす
 っかり忘れてしまつて居た。叔母
 は其を知らずに着て外出なさつ
 てお歸りになられた時に初めて気が
 がついたと言ふ始末であつた。叔母
 は笑つていらつしやつたが私は自分の
 不慮を意を心から済まなぐ慙つた。
 二三日前から物干縮には弟を連
 のビロードのパンツがかかけつばなしに
 なつて居るのをちうと見受けた。
 取りひれておかなければいけない
 が……と通るなに気はつくが
 今は忙しかう后で……其の中
 に誰かやるだらう……こんな風
 に仕るゝを他に譲らうとする身
 勝手な考があるの直に忘れて
 しまふ。弟は自分のものである
 から其の中に眼につつて、とりこんで

は来たけれど大変機嫌が悪か
 つた。父や叔母も「女はそんな不
 慮意ではいけませんよ」と言つて私
 を諭す。誠のうれたこゝろ言ふ極な些
 細なるが日々家庭の内外で起つ
 て居る。之から気をつけやうと思
 ふが、慙々実行になると中々もつ
 かしいものである。私共凡夫の生
 活にこの「骨惜み」と言ふ根性が一掃
 されたらば心と心と醜い衝突、憎み
 合ひ、憤り等も少くもつと美
 しい世界が展開されるであらうと思ふ。



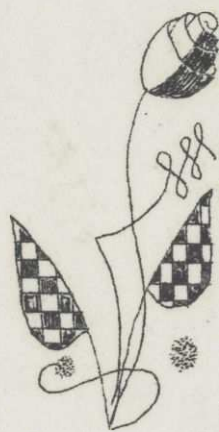
感謝の一念

去るの秋の昔、風邪がもとど、私は発熱した。左程でもなかつたけれども、列しく頭痛がするので三日、寐た。夕方になつると弟や従姉妹達が学校から歸つて来て、寢室も俄に明くたつて来た。こんな事があつたのよ……と淋しくて困つて居た私に代るく、学校で起つた面白い出来事を話しては私を慰めて下さつた。私もつりこまれて笑つたり、喋つたりして居たが、それも束の間で、忽ち頭痛に籠はれ、どうしても朗かな気持ちにならなうが出来なかつた。周りの騒々しい音は、鎚で打たれる様に「かんく」と喧しく響いて来て、うるさいやう、やかましく、いやうで

くしゃくしゃと、しるどろする。私も出来なかつた。何をしてさうしても一向面白く感じなかつた。走、又どんな旨いさうな馬車を出されても、見向かうこともしなかつた。昔が私に気がねしなかつた。元気にして居るのを目撃しては、健康の有難さをしみじみ感じた。汗水をたらうと流しながら「腰が痛い……疲れた」と言ひながら、せつせつと快活に働ける事が何よりも幸福である。と考へさせられた。お腹が空いたでせうか？と叔母は私の枕元にわざと、お膳を運んで下さつた。お飯をもつと食べて、ごらん……お茶を上げませうか？と気を配り、食事が済むと、頭が痛い、ない？今夜は顔色がいい、おと昔は真心こめていたはつて下

された。夜中に叔母は二三べんは
 起きる。いらつしやつた。氷を入れ
 かへたり。体温器で熱をはかつ
 たり。蒲團をひいて下さつたり
 して。お舅の親も及ばない程一
 生懸命に看護して下さつた。
 叔母は心配のあまりろく／＼
 休まれないお掃子であつた。一日
 中、畑に出て、お働きになり、疲
 勞しうしうしやろのりもかくは
 らず。夜、夜中迄看護して下
 さる叔母に對して私は唯、有
 難い忝いと言ふ、感謝の念で
 一ぱいであつた。
 人はこんな不時の出来事に出
 会つた時だけ感謝する
 のではないけない。何時、如何
 なる場合でもお互に感謝し
 合ひ、更に進んで社会一般の
 ものに對して感謝するの心
 抱になつたければなつたない
 思ふ。私共の日常生活を

反省して見ると何事にも對
 して感謝なしには生きられ
 行けない。掃な気がする。宇
 宙の一切の事物は私共を養
 ひ育むものであつて、天地の
 萬物總てが感謝の對象
 なのである。不平、不満、怨
 み、憎みと言つたものは感謝
 の一念が缺けて居るから起る
 のであつて、春光熙々とした幸
 福な平和な世界は唯、感謝
 を知れる人々の生活の中
 にのみ展開されて行くもので
 あると思ふ。



運動會

眼を覺して見れば暖い光線が窓の隙間を通つて室内を明くして居た。近頃珍しい晴れやかな朝であつた。支那をいへる家を出たのは九時半頃であつた。快活に立話をしてゐる者や楽しさうな笑聲で一ぱいな校庭は歡喜に満ちて居た。

「最もよき日を恵んで……」と開会の挨拶を述べていらつしやつた先生の顔もにこく。そも非常に嬉しさうに見えた。私も豫期して居なかつたぐけに在當に嬉しかつた。所が午後から空模様が急に變つて、何時の間にやらお日さんは薄鼠色の雲で包まれてしまつた。生徒の顔にも曇りがさして来た。丁度其の頃から当日の叫び物として觀衆の注目をひいて居たレギュラ對サタデーの對抗競技が始つた。

寒さと疲労で元氣もなくなつて居た生徒は何時しか席から立ち上り、一同の視線は出發點に整列した選手に集つた。いきん、と胸の鼓動が急に高鳴り出した。

ドン、と一発立ちや否、選手達は駆け出した。興奮した胸を無理に落附かせながらトラックを眺めて居ると真先にリードして居るのはまさしく味方の者であつた。一足後れて追つて居るのもレギュラを代表するRを脊負つて居るではないか！最初からこんな見るやな勝利を得たレギュラの喜びは非常なものであつた。其、どつと其の声をあげて小躍した。次から次へとプログラムは進んで行つたが其の夜毎に一二等手をとり、たまに三等手にたると言ふ珍しい好成绩を與へて居た。選手は荒い呼

吸をしなから、決勝線から戻つて来た。負けた者は勝利者の肩を叩いて喜んでやり、勝つたものは敗北者をいたけり、慰めて居る。麗しい光景を目撃した時には自然に喉が熱くなった。又、應援隊は心からの拍手喝采をし、迎へて居た。レギラの全盛時代に劣る健児の意気を見て、在当に精しく思つた。冷い風は絶え、方なく吹そ居たが誰一人と席にちぎこまつて居る者は居なかつた。

オニ部の對抗競技が始まつた頃から、ぽつぽつと雨が降り出したが、比喩の胸中には降雨を冒しても最後迄奮闘しと見るやに、優勝しと見せろと言ふ意気込みが漲つて居た。最も覚束なく思つて居た徒歩競走に於て、豫想以外の好成績を挙げ、毎ミに滑んだので、後に残つて居る數競抜は殆ど自信のあるものばかりであつた。もう之で大

丈夫と思つたが、いや、こんな中で樂觀しとけいけない。大に努力して勝つて、勝ち抜く。

過去二年の敗北を雪辱するのだと意気込んで居る全生徒はいやが上にも緊張し、行つた。レギラ得意の二人三脚の時であつた。二人の選手が揃つて容易く敵を切り抜いた時には胸がすつとする程、痛快だつた。

細雨はしとしと降り続いた。冷い雨滴は上着を通つて肌を冷く感じる筈になつたが、競技に熱中して居た私達には、そんな事を気づかつて居る余裕さへなかつた。

熱誠のこもつた全生徒の支援を受けて、悲壯の活躍をした。選手等の力闘が、画あらわれて、豫想外の壓倒的のスコアを叩いて敵を負かした時には、單なる喜びと言ふよりは感激で胸がいばいになつた。

あー昭和十年三月二十三日！
レギュラの傳統的スピリットが甦生
した大切な記念日として永遠に
生かさうではないか。

労働者に対する所感

去年の冬休みから家の前にある
油道に直徑三呎とあらうかと思
はれる水道のパイプを埋める仕事
をやつて居る。毎日々々大きな機
械を動かして、何十人と言ふ労働
者はシヤベル或はピック等を抱へ
こつこつと働いて居る。やつこの事、
家の奥前迄進んで来た。何時
も家に籠つて居る私は時々、労働
者の働き振りを覗いて見たがあ
の大儀さうな仕事振り、余りにも
ずるさうな態度に呆れてしまつ
た。大部分の者は道具こそ、手に
しそを水も足は一向動いて居な
い。引つきりな一に家の玄關の傍

にある水を飲みに来る人数だ
けで、しどんなに時を毎時
に費して居るのだから。時々、
仕事最中、着飾つた人の女
がサンドウィッチや冷たい飲み物を
賣りに来ると、失業して困つて
カウターの世話になつて居る彼
等は仕事をせうのけにして
遠慮もなく煙草をふかす
と吸ひ、菓子を買つて食べた
て居る。私は見て居るだけで
腹立たしくなつた。
仕事がない、雇ひてくれないとそれ
を口実にして、カウターの援助に
頼り、働かせて貰ひ、しかも十二分
の給料を貰いて居るのである。
大に感謝しなければならぬの
に、彼等の態度は実に傲慢
其のものの様に見える。大でさへ
三日飼へば三ヶ月の恩を忘れ
ないと言はれて居るのに、人な
である。彼等が犬にも劣る様だ

な笑似をするなんて、本当に残念な事である。いくら文化の進んだ国でも、人民の精神がこの様に墮落して居ては、國家の滅亡も憂はなからうと情なく思はれた。

彼の女

美笑子……美しくても何時も笑つて居る……何と彼の女に相應しい名前なのだらう。

私は三年前から、本舞臺に出入りする端になり、自然と色々な方々と顔馴染みになつて来たが、取り分け彼の女が私の注意をひいてゐる。体格は女としては少し大きい方である。艶のある黒髪には小さなカールが綺麗に揃つてある。何時も三つぱりした身装をして、薄化粧をした時やかな顔は如何にも朗々である。すれ會ふ毎に彼の女

は先づ「ハロー」と挨拶して輝かしい瞳をにつこりさせる。相談者等には彼の女は自分の意見は何処迄も堂々とのべるが、何事も穩かにやるので、憎まれる端な事はない。自説を主張する人と言へば、大抵は喋り過ぎたり、余り頑固なので、中々人々の氣に入らないけれども、彼の女だけは、話しても笑つても、けしやいても大へん快い感とを與へて居る。彼の女は自分と意見の反對な者に對し、其の場を離れると決して敵意を見せない。彼の女が誰かうでも好かれるのは此の爲であると思ふ。人々には長所があれば必ず短所もある。彼の女にも矢張り、小さい缺點がある。彼の女は對話しても居る時でも、歩いて居る時でも、立不勤の姿勢をすることゝ出来な妙な癖がある。

物に座談會で意見を披瀝して居る様な場合には二句々々に力を込めて話すので、其の毎毎に、頭や手足を動かし、断髪が美しかつたカールスも終には半分位ほどけてしまふ。然しこれは彼の女が如何に活潑であるかと言ふ証にもなる。

カンプトンで聯盟大会が催された時にも、彼の女は一番早くいらつやつと色々心添へ下さつた。親しくお話したのは其の初めであつたが、十年もおつき合ひして居るお友達の様な気がした。彼の女のお妹さんも後からいらつしやつたが、実に三人共睦しい、快活な姉妹である。彼の女は年上であるだけ何処となく姉さんらしい優しいところがある。私にもこんな優しいお姉さんが欲しい……とお妹さんが羨しくなつた。彼の女も最近、良縁

を得られて近い中に華燭の典を舉げられるさうである。お二人共皆から非常に慕はれて居られる方なので將來はきつと模範的な家庭を築き上げられる事だらうと祝福せずには居られない。



手紙

寒い／＼と思つて居る中に朗かな緑の春が訪れて参りました。

三月！毎年この月にある学園の春季運動会も愈々二十三日に行はれる事に決まりました。小さな生徒達は大喜びで、先生、毎日運動会のお稽古をしませうとて、あどけない子供の熱心振りには先生も感心していつしやいました。お達にもあんな時代があつたのだがと思ふと、昔が非常に恋しく思はれます。どうも一運動会って一季に一変しかないのでうと不服に思つた事がありました。××学園運動会、××縣人等

ヒクニツクと競争さへあれば、何処迄も追かけて行きたかつた私達でした。ね、二三季、オウ、オールを着て、つい帽子を被つて一運動会をやつた事もありましたね。さぞ不恰好な姿だつた事だらうと思ひ出しては吹き出したりします。そしてあの頃は、若、それは熱心でしたのね。どうかして一等になりたいものだと思つて、毎朝五時頃起床し、従姉妹達と一緒に、広い畑を一回した事もありました。それも含めて一生忘れられない懐かしい思い出となつてしまひました。私は六へん走るのよ。私もよと競技に多く出られるのを得意に思つて居たのも、たつた此の夏の様でございます。それが二変とばかりかへうの過去だと思ふと淋しい感じも致します。

此の頃から一運動会の準備にとりかかりました。街中に集うた此の日にこそ――生き／＼と歌ふ者の声にひかれて私も久しぶりに大声を出して歌ひました。本当に威勢のいい歌ですのね。全盛時代のレギラのスピリット



が、物しく心身に染み込む痛な感じが致しました。

去年は僅か一競技に負けた事に惜しくもサタデーに敗れました。口惜しくてもたまりません。一昨年はつと勝つて居たのですもの。

今年、負けては先輩の方々に申訳がございせん。たとへ、生徒は相手の半数しかなくとも「恐ろしく足らず」とは、大いに力んで居ります。

毎週二夜のアリーのお稽古の元気のいゝアリー。負けるものかと言ふ、一致団結したレギラのスピリットを發揮して居ります。

應援團長は声をかうして、此を元気づけ、又生徒も一人残らず、一生懸命に声をはり上げて、叫んで居る光景を見て居ると、

涙ぐましい程でございます。去年の敗北をどうしても雪辱しなければと、そればかりが此の念頭にあるのでござい

ます。負ける様な事があつたう、どんなに落膽する事でせう。あなたも是非いらつしやつて應援してく下さいね。お待ち

して居ります。

競争は公平だと、口癖の様に言つて居た従妹も自発的にやつて見ると言ひ出しました。「自分自身にも

不思議な程、今年の運動会が待ちどおしいのよ」と笑つて言つて居た従妹の言葉葉を聞いた時には、本当に

嬉しく思ひました。私も走れるなら大いにやるのだがと残念でたまりません。

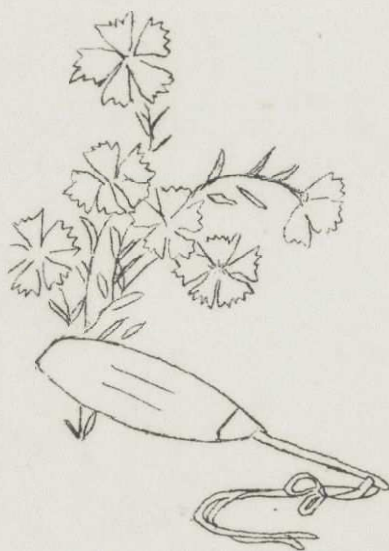
レギラは「人物缺乏」と先生があつしやつて居ました。お言葉通りでございます。下手な者



も上手な者も全部が出場しないと人が足りないのですもの。徒歩競争
 は皆、覚束ないのばかりでございすすが、練習さへすれば上達するものと
 競技には大いに自信を扱つて居りす。協力して勝つレギラの伝統
 的なスピリットで優勝して見せる覚悟でございす。
 三月二十三日、どうぞ、お忘れなくいらつしやいませぬ。
 では機械嫌よう。

三月十日

中本八重子様



油断

買物が思ひの外ひまどつたのでおなけ
 ぺこく／＼になつてしまつた。日本街にま
 ると叔母は早速、おすしを一箱買つてい
 らつしやつた。帰りを急いで店たので道
 々食べる事にした。竹箱を開けろと食
 慾をそそる酢の香がおいしく香つて来
 た。私も一つ戮きながら自動車を探縦
 し、店たが往來の激しい町の真中な
 ので食べて居る稀な気がした。万
 一の事があつて、乗つて居る者に怪我
 でもさせるとは申訳ないと思ふと急に恐
 しくなつて来て、叔母の薦めろのも断つ
 て我慢して居た。それでも叔母は自
 分を遠だけで食べては気がすまない
 見えて、「おいなりを戮かない？」。卵
 巻を上げまうか？と頻りにおつしや
 つて下さつた。虫の報うせか私は何だか
 今食べてはいけない様に思はれて、後
 から戮くかういふのと最初は断つて
 居たもの、と／＼卵巻をいたゞく
 事にした。

前後には他の自動車が三尺位離
 れて通つて居た。左側には黄色
 の電車が並行して居た。速力が
 中々やかなので、私も同じ調子で
 走らせながら叔母のさし出した箱
 かう卵巻を取らうと一寸横を向
 いた瞬間、ふいに前の自動車が止
 った。ゴトーンと大きな音をたて、
 後の者は席から落された。じまつ
 た。と今更の様に後悔しながら
 らばんやり前の自動車を見て
 ろろとドライブして居た男の人が
 早速下りて来て、ハンパーや他の
 所を調べて居た。保険にはいつて
 居るのだから心配しなくてもいいよ
 と流石は叔母である。落ちつきは
 らつて心配はない。とあつし
 やろので何も恐しいとは思はなかつた。
 「ライセンスを括つて居ますか？」と
 尋ねられた時には自分にも不思議な
 程、外面だけは落附いて居た。け
 れども頭の中は何が凄いい勢で

泥を巻いてゐるやうで少しも穩やかではなかつた。

白人はもう一度自動車を調べて見たが大きな音の割合に何にも故障はなかつたらしい。何処にも損害はないから「オーライ」と言つて手を振りながら行つてしまつた。ほつと安心してハンドルを握らうとするとき、のさばり汗がにじんでゐた。さつきの箱のおすしも敬馬いた様になり、ばうくになつて私の足元にこぼれ落ちてたので皆大笑ひした。

日暑い日曜日

二三日この方と真夏を思はせる様々日私がつづいたが、今日の日暑い日は又格別であつた。日曜学校の生徒も何時になく騒がしく、先生のお話もさつぱり耳にはいらぬ様子であつた。XXさんはさつきから時計はつか



り見てゐた。多分早く歸つて何処かにおびに行かうと思つてゐるのだらう。或者はぼんやりと窓の方に視線を向けてゐた。冷いものでも食べたいなと思つてゐるに違ひないと次から次へと生徒の表情を見ながら種々な事を想像してゐる。私の自分の心も先生のお話よりも他の方面に奪はれてゐるのであつた。日暑いので学校も早くひさあけて教室のお掃除をしてゐる。と後か「ビーチに行きたいわ」と言つてゐた。本当に今日けビーチに於つてこの日である。こんな日に家でぶら／＼してゐるのは余りに惜しい気がした。家に歸つてその事を話すと叔母も父も大賛成だつた。それがお辨当！早くしなければならぬ。と大騒ぎして支度が出来来るや否や直ぐ出かけた。久しぶりに通つて行く路傍の並

本、野原、人家をなつかしく眺めて
居る中にいつしかあの立派な橋を
渡つて居た。浜の白が風に送られ
て来る。

「ビーチの空気は素敵にいいわ」なん
て小さいいところが生意気な事を
言つて居た。

「どしやん」

「と波の寄せて
来る音がぞろぞろ来た。むし暑い田

舎の午後とは比較にならない静か
さ、とえおよさー。日の丸のお握り

ご飯にあつた物の、お辨当も山浜の

珍味よりも遙かに馳走であつた。

白い砂を踏んで私達四人は浜辺に

出て広い浜を何時までも眺めて居

た。大きな波は二三分おきに湧き

つくり、巻き上つたと思ふとどぶんと

白いしぶきを散らしてくづれる。

「さざざ」と諸に寄せて来る穏やかな

小波は子供等を何より喜ばせて居

た。砂の上にぬそべつて居る若人、お
ひたけむれて居る子供等の海水着

姿も涼しそうであつた。三年ぶ
り私もあるな姿をとり、毎週の様に
浜辺に来たものであつた。あの
凄惨い波の中に飛び込んだ時の気
持よさは忘れない。泳ぎが出
来ないくせに深い所に行つて随分
塩水を飲んだ事もあつた。それか
うけ毎季リップタイドがあるとか
悪性の傳染病が流行してゐると
か言つて三年ばかり過してしま
つた。もう一度黒く日にやけて水
を浴びて見たい。……だが何とな
くいやだ」と矛盾した気持ちで私は
浜中を人魚の様に泳ぎまはつてゐ
る人を何時までも見つめて居た。

